

同窓会だより

28

ご挨拶

会長 斉藤 誠

このたびの東日本大震災にて被災された皆様に心よりお見舞いを申し上げます。この同窓会だよりがお手元に届いている頃には、東日本地域での被災地域の方々の多くが、できるだけ元の生活に戻られていることを願うばかりです。

大学では、震災後、約一週間で卒業式が行われ、皆さんご存知の東武東上線は、動いたり動かなかつたりで先生方も大変な状況のようでした。学内は、大きな被害はなく、復興・支援のボランティアとして参加をしたいという学生が多くいるという、卒業生としてうれしい情報も入ってきております。

ところで、応化同窓会では、川越キャンパス連合育成会（以後連合育成会とする）に入会し、今後も活動を継続していくことになりました。連合育成会につきましては、前回の会報でもご案内をさせていただいておりますが、簡単にご紹介させていただきます。今までは、応用化学科卒業生だけのための応化同窓会でしたが、連

合育成会に入会することにより、川越キャンパス全体の学部の同窓会と協力し、卒業生および学生に対しての情報提供、各種支援を行うことになりました。

今年は、川越キャンパス50周年で、10月1日には、応化同窓会の総会、50周年記念祝賀会が開催されます。その他の日程でも各種イベントが計画されており、日頃、大学の様子が気になっているが、なかなか行く機会がないと言われる方も、是非、この機会に御来校いただき、イベントに参加し、交友を深めていただければと考えております。同窓会では、これらの事業にも出来る限りの協力をしていく所存です。

そのためにも会員の皆様のお力添えを頂戴したいと考えております。同窓会に対しまして、ご意見・ご要望等ございましたら、ご連絡をいただきたいと思いますので、宜しく願い申し上げます。

理工学部長就任にあたって

応用化学科・教授 吉田 泰彦

2011年4月より東洋大学理工学部長に就任いたしました。今年は川越キャンパスに工学部が創設されてから50年であり、10月1日には川越キャンパス創設50周年記念式典を行いますので、ご参加の程お願いいたします。

私は、山下忠孝先生（1989年4月工学部長に就任）のお陰で東洋大学に奉職いたしましたので、工学部創設30周年に山下先生が工学部長として臨まれ、50周年に私が理工学部長ということは何となく縁を感じますし、身が引き締まる思いとともに光栄にも感じます。

1961年機械工学科、電気工学科、応用化学科の3学科で発足した工学部が、翌年には土木工学科と建築学科を加え、1966年には大学院工学研究科、1975年に工業技術研究所、1976年に情報工学科、1996年にバイオ・ナノエレクトロニクス研究センター、2001年にコンピューショナル工学科、2005年に機能ロボティクス学科の増設、と発展してまいりました。2009年より工学部を解消し、理工学部と総合情報学部の2学部に変更しました。理工学部は機械工学科、生体医工学科、電気電子情報工学科、応用化学科、都市環境デザイン学科、建築学科の6学科に再

編し、総合情報学部は文理を融合した総合情報学科・1学科からなります。川越キャンパスで学び社会に飛び立ちました卒業生は工学部・工学研究科を併せて37,000人強にものぼり、それぞれの専門分野で活躍しています。工学部・理工学部を通じて、「哲学のある（考えることのできる）技術者の育成」という理念は一貫しております。大学の存在意義は教育・研究・社会貢献であります。学生・院生・教職員の努力に加え、卒業生の方々の支援と協力は欠かせません。これからも同窓会からのご協力をお願いいたします。

私は1983年4月東洋大学工学部応用化学科講師に着任して以来、応用化学専攻主任、応用化学科主任、工学研究科委員長、副学長のお役目をいただき、これまでも何とか務めてこられましたのも、応用化学科の教職員・学生・卒業生のご指導・ご協力のお陰であります。理工学部長としてこれからの川越キャンパスをまとめる重任に押しつぶされそうですが、是非とも卒業生・同窓会のご支援とご協力をお願いいたします。

応用化学科主任・就任にあたって

応用化学科・教授 石井 茂

今年度4月より理工学部応用化学科・学科主任に就任した石井です。応用化学科は1961年に工学部創設と同時に設立されました。初代学科主任として岡 俊平教授が就任し、以来山下先生をはじめ多くの教授陣が学科主任として、応用化学科に支えられ運営されてきました。また2009年には工学部から理工学部へ改組になりましたが、発足以来の学科名称である「応用化学科」

のまま今年度で50周年を迎えることになりました。応用化学科では、この間多くの教員によって運営され発展してきましたが、50年と言う年月に於いては学科だけでなく、川越キャンパスも大幅な変化をもたらし、創立以来の建築物もなくなり、新たに7号館、学生ホール食堂棟の新設、工学部から理工学部と総合情報学部へ改組されました。また今年3月には設立当初から

在籍した井原、松永両先生が退職し、工学部設立当初の頃とは、川越キャンパスも、教員、建物も大幅に変わりました。社会でもこの50年間で石油ショック、リーマンショック等、様々な困難があり、大学に対する社会のNeeds、また学生自体も変化してきました。しかし応用化学科では、この間それぞれの分野で活躍できる人材を多数世に送り出してきました。そして川越

キャンパスで設立時から名称が変更されていない学科は応用化学科と機械工学科だけであり、学科としてのIdentityを保ちつつ、学科教員一丸となって更なる発展を目指して行きたいと思えます。そのため応化・卒業生の親睦団体である応化同窓会とも協力し、社会で活躍できる人材の育成に勤めたいと思えますので、ご協力のほど宜しくお願いいたします。



学生諸君と歩んだ47年間

応用化学科元教授 松永 勝治

中央大学を卒業して半年経ってから就職担当の須藤先生より東洋大学の助手採用に応募してみないかと声をかけて頂いた。東洋大学工学部応用化学科主任・岡先生の面談を経て、早速11月より須藤先生（東京大学火薬学科卒）の後輩に当たる山下先生のもとで助手生活を送ることとなった。助手の担当科目は実験科目だけで、翌年より工業化学実験グループ（山下、門田、脇、本山）の仲間入りをした。卒論実験に関しては、早くも応化1期生2名の指導をすることとなった。70歳で定年を迎えた平成23年年3月には47期生を社会に送りだした。私が直接指導した卒論生・院生は320名に上る。

山下研（山下、脇、松永）での私の研究テーマは、当初固体ロケット推進薬関連の合成研究であった。その中で燃料兼バインダーとしてのポリウレタンに強い関心を持ち、基礎的なことを学ぶことを念頭に速度論的研究を精力的に展開した。研究成果のエッセンシャルである私の博士論文は「ポリウレタンの調製に関する基礎的研究」である。一方、ポリウレタンに関わらず、多くの企業との共同研究、さらには企業からの委託研究を積極的に推進し、浄財ともいうべき奨学寄付金も戴いた。これら外部獲得資金

は数千万円に上る。

山下研は昭和63年度より有機材料第一研究室に名を変え、同時に脇先生は有機工業化学研究室を立ち上げた。山下先生の定年退職（平成7年3月31日）に伴い、私が引き継ぐ形で有機材料研究室をスタートさせた（平成7年4月1日）。さらに責任ある立場になり、研究意欲旺盛な卒論生・院生とともに身を粉にして研究室を運営してきた。

学部教授会の下部組織に各種委員会がある。初めて委員長を仰せつかったのは学生関係員会であった（2年間）。体育会本部室、文連本部室、工学祭常任委員会室に頻繁に足を運んだ。イベントでは陣頭指揮を執ることもあった。自治会室には足を踏み入れることが困難であったが、委員長のA君と副委員長のB君と3人で酒を酌み交わし、胸襟を開いてお互いの立場を理解し合えるまでになった。

次は安全委員会の委員長を引き受けた（10年間）。当委員会の立ち上げに深く関わったこともあって指名された。このときに応用化学科では必修科目「安全化学」を設け、その担当者になった。大学における実験研究で安全神話が瓦解しないことを祈る。

最後に就職委員長を務めることになった（6年間）。就任当時は売り手市場であったが、リーマンショックがもたらした経済不況は内定取り消しに発展し、買い手市場になった。就職氷河期を乗り切るには、入学時の偏差値を卒業時までに数ポイント押し上げる努力が不可欠であ

り、先生方の教育力に期待したい。

最後に応用化学科同窓会が風前のともし火に見える。3月23日の終身会費納入者はたったの9名。連合育成会と連絡を密にして組織改革に着手しなければならない。

48年間を振り返って

応用化学科元准教授 井原 正吾

1963年に工学部助手として着任し、以来川越キャンパス一筋でしたが、今では短くもあり長くもあった48年間、変わったものも変わらぬものもそれぞれに感慨深いものがあります。

配属された外山・田中研究室は油脂化学分野の研究をしており、外山教授の下に田中助教授、佐野、斉藤助手、さらに米国農商務省の受託研究をしていた関係で日清製油から出向の増澤研究員、秘説秘書の中村さん、数年後に加藤助手の着任、石原講師の移籍がありました。延べにしてそれは大所帯でした。増澤さんの出向期間は数年でしたが、遷移金属触媒の調製と大豆油の選択水素化について様々なことを教わりました。

1期生が4年生になると同時に完成した第1実験棟で卒業研究が始まり、選択水素化大豆油の精製と分析、未利用植物種子油の分析に携わりました。5期生あたりまでは豪傑も多く苦労がありましたが、年齢が近く共に遊んだ楽しい思い出のみが残っています。この頃は青桐の種子に含まれる特殊な脂肪酸、ステルクリン酸（シクロプロペン酸）の構造解析に休日返上で熱中していました。

その後まもなく田中教授が急逝され、加藤助手と共に君島研へ移籍せざるを得ませんでした。

た。君島教授が病気で退職されるまでの7年間は、アクリダンやビタミンEに関連した工業用ゴムの老化防止剤の合成研究をしていました。

再び宮島教授、伊藤講師の主催する有機合成化学研究室に移り、イミン-エナミン互変異性とそれを利用する複素環化合物の合成に従事しました。暫くは良い研究テーマが見つからず落ち込んだ時期もありましたが、一度良いテーマを見つけると研究は面白いように発展しました。種々の反応試薬を調査して、研究の骨格ができました。これらを基に論文を発表し、伊藤准教授がお亡くなりになった直後の忙しい時期でしたが、吉田教授の強力なお勧めと多大なご協力により博士論文を纏め得た次第です。

科学研究においても「流行り廃り」があって、どうも「廃り」の分野ばかりを歩いてきた気がします。今になってみれば40年間のウォーミングアップがあって、時機を得てこの8年、複素環の合成に集約できました。お世話になった先生、若い院生・卒論生、友人知人との係わりの中で自身が磨かれ、何時しか実を結んだものと思います。

自身の経緯のあらましと若い方々の一助になれば幸いとの思いを記した次第です。

平成22年度春学期応化同窓会賞

平成22年度の受賞者は以下のとおりです。(受賞者名、所属研究室(指導教員)、タイトル)

- | | |
|---|---|
| ◎畠中 高輝 【化学・生物発光(柴田)】
t-BuONa を添加した DMSO 溶液中のホタルルシフェリンの化学発光 | セン感受性の解析 |
| ◎服部 美佳 【有機合成(井原)】
2-アリアルキナゾリン-4-オン誘導体の合成-IV | ◎河合 広 【生命工学(宇佐美)】
「耐塩性キチナーゼの探索」 |
| ◎小宮 洋平 【食品生物化学(安藤)】
発芽酵母遺伝子破壊株ライブラリーからのトリコデセン耐性遺伝子の探索 | ◎西田 裕 【生命工学(宇佐美)】
耐塩性リパーゼ生産菌の探索 |
| ◎山根 由美 【食品生物化学(安藤)】
発芽酵母の遺伝子多重破壊株によるトリコデ | ◎渋谷 麻衣 【生物工学(川瀬)】
フェントン反応によるトルエンガスの分解除去における反応経路の解明 |
| | ◎関根 真 【生物工学(川瀬)】
フェントン反応を用いた烏龍茶廃水の分解除去 |

応化同窓会総会のご案内

第26回東洋大学工学部応用化学科同窓会、講演会ならびに懇親会を下記の日程で開催いたします。皆様お誘い合わせの上、ご参加下さい。

日 時 : 平成23年10月1日(土) 応化・情報実験棟 4F 411教室
10:30~ 幹事会 応化・情報実験棟 4F 411教室
11:00~ 総会 応化・情報実験棟 4F 411教室

総会終了後、連合育成会主催の記念講演会、川越キャンパス50周年記念イベントが行われ、終了後には祝賀会が開催されます。詳細は、東洋大学のホームページ等でご確認下さい。多くの皆様の参加をお待ちしております。

ご注意：駐車場の用意がありませんので、電車等をご利用下さい。

東洋大学工学部応用化学科同窓会会報第28号

発行 平成23年9月1日

発行所 東洋大学工学部応用化学科同窓会

〒350-8585 川越市鯨井2100

TEL 049-239-1370 FAX 049-231-1031

郵便振替口座 00140-5-86601

印刷所 丸栄印刷株式会社

〒114-0023 北区滝野川1-1-21

TEL 03-3910-5990

FAX 03-3917-0689